

It's now or never

「絶対に許さない！あの時、私たちが受けた辱め。つらく、どうしようもなく惨めで、自分の全てを汚されてしまった気分だった。日本軍が犯した大罪は呪われて当然だ。」

…元従軍慰安婦の韓国人女性の悲痛な叫び。憎んでも、憎んでも、決して晴れることのない恨みが滲み出ています。

「慰安婦問題は既に解決している。むしろ、日本が朝鮮人を日本人にしてやったおかげで朝鮮は今のように豊かになったんだ。謝罪を求めるより、感謝してほしいくらいだね。」

…とある日本人が放った言葉。当時の朝鮮の人々がどれほど苦しんだか、知る由もないのにこう語る。「日本は絶対的に正しかった」。そのような妄信があるからこそ、このような発言ができるのです。

自分の意見を一方的に述べるだけで、他者の意見に耳を傾けようとしなければ、人間は永遠に分かり合えません。そこにあるのは、激しい対立のみです。そして、この対立で苦しんでいるのは紛れもない戦争経験者です。

70年前の、大戦争。その爪痕が今この21世紀になってもなお、人々の対立として色濃く残っていることを、これらの発言の数々が如実に物語っています。

日本、中国、韓国、この3国にはある問題が横たわり続けています。歴史認識問題です。歴史認識問題とは、南京事件や従軍慰安婦などに代表される、主にアジア・太平洋戦争に関わる出来事への認識の食い違いによって対立が起きている問題です。昨年慰安婦問題で日韓政府は合意に達しましたが、両国民の対立はなくなっていません。そう、歴史認識問題の本質は国家間の問題ではありません。世論対世論、即ち、私たち一人ひとりの問題です。その結果として現れているのが、冒頭に挙げた、暴言です。あれらの発言は氷山の一角に過ぎません。これらは、決して許されるものではありません。何故なら、対立が戦争経験者を苦しめているからです。だからこそ、歴史認識問題の解決が不可欠なのです。

本弁論の目的は、「人々が対立を乗り越えることで、対立に苦しむ戦争の経験者を救うこと」にあります！

それでは、歴史認識問題を巡る対立の現状を見てみましょう。対立と言っても、デモ、ヘイトスピーチ、差別偏見など様々あります。これらの対立は、歴史認識の食い違いが対立感情を刺激した結果と言えます。

実際に、歴史認識の食い違いが人々の感情に影響を与えるというデータがあります。昨年行われた日中共同世論調査によると、日本人の9割近くが反中感情を抱き、そのうち半数以上が「歴史問題で日本を批判するから」と述べています。また、中国人の8割近くが反日感情を抱き、そのうち7割以上が「過去の歴史について謝罪し反省していないから」と述べています。また、日韓でも似たような結果が得られました。これらより、歴史認識問題が日中、

日韓の世論の対立を起こしているとわかります。

その上で、対立で一番苦しんでいる人は誰でしょうか。それは戦争経験者たちです。

「なんで日本は私たちが認めてくれないの？」元従軍慰安婦の悲痛な叫びです。

「祖母の経験は、人生は、否定されなくてはならないの？」慰安婦の孫は泣きながら、訴えます。

日本が慰安婦の存在を否定する報道がされる度、涙ながらに自身の、自分の祖母の経験を、存在を、訴える人たちがいるのです。今の対立は、これらの人々を苦しめてしまっています。

「せめて事実を認め、罪を償ってほしい...」。対立は、戦争経験者の悲痛な思いを封じこめ、彼らを苦しめているのです！

では、なぜ、歴史認識は対立を生み出すのでしょうか？

原因は、現在の歴史認識が自国本位のものだからです。例えば、南京事件。中国人は、この出来事によって民間人含め30万人の犠牲者が出たと主張し、この出来事を「南京大虐殺」と呼びます。対して、日本では犠牲者数は3万人だという主張があります。中には、中国人の主張は全部嘘で、日本は虐殺などしていないという意見もあります。日本で、この出来事は「南京事件」と呼ばれます。

例えば、従軍慰安婦。日本軍が朝鮮の少女を連行し、慰安婦にした。韓国の主張です。慰安婦は民間業者が行ったもので、軍は関わっていない。日本の主張です。

これらの事例に共通するもの。それは、中国、韓国は日本が圧倒的に悪者であったと言い、日本はそれを否定し、弁解をしているという構図です。つまり、歴史認識問題において、日本も、中国も、韓国も、自国に有利な歴史認識しかしていません。なぜか。それは、国の誇りに繋がるからです。中国や韓国は、日本を貶めることで、悪を追及する正義の立場になることができます。日本は、過去の残虐な行為を否定することで、自らの悪から、国の恥から目を背けることができます。結局はどちらも、自国の意見を妄信しているのです。

「日本軍の兵士として、私は南京事件に関わった。日本軍の暴行のことは今思い出しても恥を感じる」南京事件に関わった元日本兵の声です。

「どんな気持ちだったかって。もう殺されに来たんだと思え、泣くしかなかった。話し相手はいなかった。泣くしかなかった。」元慰安婦が当時の心境を語った言葉です。

南京事件はなかった、慰安婦は嘘だ、日本がこの主張を守ることによって彼らの声はかき消されます。日本は彼らの声に耳を傾けることすらしていません。

確かに自国に誇りを持つということは、大切なことです。しかし、今の各国の歴史認識は自国だけを妄信させるものになっています。妄信は排他性を生み、排他性は対立を引き起こします。自国の意見への妄信こそが、他者の意見に耳を傾けない排他性を生み出し、人々の感情的対立に繋がるのです。

では、私たちはどうしていきべきでしょうか？私たち一人ひとりが、歴史認識を改めなけ

ればなりません。歴史は、解釈で成り立ちます。客観的事実は変えられませんが、主観的な解釈は変えられます。だからこそ、解釈次第で歴史は対立を生み出すこともあれば、価値を生み出すこともあるのです。今必要なのは、自国本位の歴史認識から脱却した、新たな歴史認識の枠組みです。

現在の歴史には、自国本位の歴史認識の結果、私たちが捨てている出来事があります。それは、歴史の闇です。誰も目を向けなければ、それは永遠に闇のままです。

例えば、南京事件を非難する中国人は、物資の輸送が乏しく、現地で資源を調達せざるを得なかった日本軍の状況を知っているでしょうか？韓国人は、戦争において慰安婦制度を作った国が日本のみではない、ということを知っているでしょうか？旧軍隊内のルールはしっかりしていた、決して野蛮ではなかったと主張する日本人は、銃弾が飛び交う生と死の間がどんなものか、想像したことがあるでしょうか？

歴史が持つ闇に目を向けると、今まで信じていた国の誇りは無くなるかもしれません。しかし、そこに目を向けなければ見出せないものが必ずあります。闇に葬られていたその歴史に目を向ければ、対立解消への光明が見えてくるのではないのでしょうか。私たち一人ひとりが自国本位の歴史認識をしていないか見つめ直せば、この不毛な対立に終止符を打てるのです。

そのために、私は 1 点の政策を提案します！教科書作成の監査機関に戦争経験者を採用します。これは、教科書作成の過程においてその内容が偏ったものになっていないか監査する第三者機関です。これまでこの監査機関には研究者や学者が採用されていました。しかし、歴史認識問題の特性としてアジア・太平洋戦争前後の出来事に関する情報量は大変少なくなっています。だからこそ、戦争経験者の声を反映させることで、より詳細な記述にする必要があります。これによって、史料や記録からはわからない、そう、闇に葬られていた歴史に光が当てられるようになるのです。そして、教育を通じて私たち一人一人が自らの歴史認識が自国本位でないかを見つめ直すことができるのです。それは自国本位の歴史認識から脱却し、新たな歴史認識の枠組みに人々を導き、対立の解消に向けて歩み出すことに繋がります。

最後に、改めて皆さんに問います。この不毛な対立で、最も苦しんでいるのは誰でしょうか？きっと 70 年前の悲劇を直接経験した人たち自身ではないでしょうか。冒頭で日本を呪った元慰安婦の方。彼女は、自らが経験した悲劇が孫の代にも争いを生んでいる現状をどんな気持ちで見ているのでしょうか？誰よりも悔しく、どうしようもなく痛ましく、なす術のないもどかしさに苦しんでいることでしょうか。彼らに、不毛な対立が解消していく光明をせめて見てほしい。10 年後では遅すぎます。It's now or never.今しかないのです！

ご清聴ありがとうございました。